「身体学」の研究課題
―身体学という学問体系の構築―

Zur Forschungsaufgabe von „Somatologie“:
Die Konstruktion des Wissenschaftssystems

キーワード：身体学、現象学、スポーツ運動学、キネステーゼ、時間意識
Schlüsselwörter: Somatologie, Phänomenologie, Bewegungslehre des Sports, Kinästhese, Zeitbewußtsein

武藤　伸司
MUTO Shinji

はじめに [1]

「身体学」とは一体何であるのか。この聞き慣れない言葉は、フッサールという哲学者の著作である『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想　第3巻　現象学と諸問題の基礎』（以下『イデーンIII』と略記する）という著作で述べられている、「Somatologie」（HuaV, S.7）の和訳である[2]。フッサールはこの語の意味について、「身体の知覚と身体の経験…身体性に関する学問を身体学と名づける」（HuaV, S.7f.）と述べており、本稿もその意味を踏襲してこの表現を用いる。このことから、表題の研究課題とは、身体性哲学ないし哲学的身体論の観点から、身体を巡る諸問題を研究する、ということとなる。

1. 現象学の概略と身体学の内実
―キネステーゼ―

ここで本稿は、研究課題の考察に入る前に、その前提となっている身体性の内実、または身体学の対象領域について、フッサール現象学の概略と共に、簡単に付言する。

フッサール現象学において、鍵概念となるのは、「意識の志向性（Intentionalität）」である。非常に簡単な言い方をすれば、これは、「意識が常に何かに向かっている」ということである。つまりそれは、「～について」という意識の状態を示している。このような状態の意識の中で、そこに現れている様々なものごとを、現象学では「対象」と呼ぶ。したがって、現象学的な意味での対象とは、意識と無関係に、その外部を想定して素朴に実在的に存在しているものごとではないのである。それは、我々の意識に現れているという限りで、対象という言い方ができるに過ぎない（これを現象学では対象措定と言う）。

もちろん、この現れ方は多種多様である。感覚や知覚として現れたり、表象や判断（概念的な思考）として現れたりする。こうした意識に現出しているものは、まさに意識の働きの内で構成される。この構成という働きこそが、意識の志向性が備える本質的な性質を示している。そうした多様な現出が如何にして成るのかという志向的な構成を問い、分析することが、まさに現象学という学問領域の基本的な課題なのである。

こうした現象学の根本的な探究方針の中には、「身体」という類概念で括られる領域的な存在[3]も含まれている（vgl.HuaIV）。この身体という領域的な存在は、哲学にとって一般的かつ重要な問いであり、しかしそ

れゆえ非常に困難な課題である。つまりこの問いは、精神（心理的なもの）と物体（物質）ないし自然（物理的なもの）という、異なる特徴を併せ持った身体という存在を、如何にして理解するか、という哲学の伝統的な問いなのである。

身体は、意志によって任意に動かすことができる反面、いくら意識的に制御しようとしてもそれができないという特徴、すなわち肉体的な制限を持っている（意志とは別に、不随意な反応をすることもある）。この相反する特徴の一面だけに重点を置き、精神の側に身体を還元すれば観念論となり、物体の側にそれを還元すれば実在論となる。しかし、どちらの側に偏っても、身体の全面的な解明に至らないことは明白であろう[4]（哲学がこうした拙速な還元主義に陥ったからこそ、心身二元論という大仰かつ解けない問題系が形成されてしまい、精神と延長を実体としたデカルトにその根があると筋違いな批判をして目を逸らしてきた[5]）。それに対して現象学は、意識の志向的な構成という観点から、身体が精神と物体という類概念の素朴な措定へと分かたれる端境の契機を見出そうとする。その契機こそが、感覚である。

上で述べた意識の志向性による対象構成とは、知覚経験の場合で言えば、感覚与件を統握（auffassung 解釈）することによって成る。つまりこのことは、感覚に対して何らかの意味付与（統握）が行われ、端的な感覚を超えた（超越した）内容を持つ知覚として意識されるということである（このことは、例えば色の場合、単なる「赤い」という感覚ではなく、「リンゴの赤」というように、述語の内容が増えるという事態を示している）。感覚は、身体の感覚器官において直接に受容されているが、その「生の感覚」（これを現象学では「体験（Erlebnis）」と呼ぶ）に対し、意識はそれを意味や過去の「経験（Erfahrung）」（差し当たり、感覚を基に構成されたものを経験と呼ぶ）を用いて、感覚所与以上のものへと構成する。したがって、感覚は、超越する以前の原本的な意識の体験として、直接的に身体性を呈示するものなのである。

また、このように感覚的な体験から構成された経験は、それを経験していると看做される意識的な主観の興味や関心に即して、経験の内容を意識の外に実在するものと看做せば、物的な、すなわち自然科学的な対象（例えば物理学）と解釈される。他方、そうした経験を意識の内に観念的にあるものと看做せば、心的な、すなわち精神科学的な対象（例えば心理学）と解釈される。つまり、どのような興味関心のもとで経験を解そうと、そもそもその解そうとする対象の根は、身体的な感覚にあるということである。

したがって、フッサール現象学において、感覚的な体験の「場」である身体は、意識構成の分析的な解明の要であり、喫緊の課題なのである。現象学的な眼差し（この見方に至る方法が「現象学的還元」と呼ばれる）の中で、身体性として呈示される感覚の分析こそが、身体に対する研究の基本となるのである。

以上のことから、身体学が取り扱う領域とその問題設定は、差し当たり感覚に置かれることになる。しかしながら、フッサールの意図する身体学の圏域は、非常に広範である。感覚を研究課題にするとしても、単に五感の諸様態を取り扱うだけではなく、そうした諸感覚の、根本的に共通する特性を、本質として主眼に据える必要がある。それの本質とは、フッサールの指摘する「キネステーゼ（Kinästhese）」である。

キネステーゼとは、「運動感覚」という意味であり、それは、感覚するということの推移と変化を示す言葉である。運動ということから容易に推測されるように、ここでの感覚の変化は、「時間性」という意味も含んでいる。ところで、この感覚の変化は、身体の動きと常に共にある。つまり、我々が「身体」という言葉で捉えている、ある一定の領域は、感覚の「動く感じ」として意識に現れているのである。例えば、身体の「ここ」という空間的な一点は、「動く」ということから考えれば、方向づけのゼロ点、ある種の動的な感覚の推移の開始点であると言える。このゼロ点が基準となって、動く身体の固有性が際立ち、「この身体としての私」も成立する（キネステーゼは、自我を、対象に対する極として措定する要件でもある）。このような感覚の変化と身体の動きの連動性、すなわちキネステーゼが、身体性の本質であり、この点にこそ、身体学の課題がある。つまり、身体の最も重要な特徴がキネステーゼという「運動性」であると考えられることか

ら、身体学はその様々な様態の研究と解明を目的とし、それを中心的な課題とするのである。したがって、以下において我々は、このキネステーゼを中心に、本稿の主題を展開し、提示していくこととする。

2. 身体性の問題系を「学」として扱う方法と体系化の試論

では、具体的にどのような研究を行うことになるのか。まず、身体学が「学」と名乗る以上、一個の学として、その領域に関する諸々の知識について、ある程度の体系を有している必要があるだろう。もちろん、現象学は一切の体系化を拒み、常に現実の経験に即してその内容を更新していくことを探求の目的に据えているが、しかしながらそれでも、探求の始まりの足場として、仮組みの基礎を置くことも無駄ではないだろう。そこで差し当たり、この学の具体的な構造として構想されるのは、「現象学を基礎理論に据え、スポーツ運動学[6]を理論的応用として位置づける」という指針である。現象学とスポーツ運動学という、これら二つの要件を柱にして、それらを総合した一個の学問体系を構築することが、試論とは言え、本研究の最終的な目標となる。

ここで、現象学とスポーツ運動学の二つを用いる理由とは何か。現象学の方は、上述したように身体学の由来であり、キネステーゼという中心課題についての基礎理論や問題探求の方法論を呈示するというものであった。このことから、現象学は本研究の中心軸となる。他方、スポーツ運動学であるが、これは周知の通り、身体の本質と考えられ得る運動性を軸にして、運動の主観的な感覚を基にスポーツの技を研究するものである[7]。クルト・マイネルに始まるこのスポーツ運動学は、身体の位置変化や、運動の力学的な分析といった、物理現象の解明とは異なって、運動身体（主体）の感覚体験の直観におけるその形態、発生、記憶、意味などを基に、生き生きとした実存的な人間の運動そのものを直接的に取り扱うところに特徴がある。マイネルのスポーツ運動学は、単に身体的な運動を自然科学的な研究に還元することに対抗して、人文科学的な意味や価値観から運動を解釈するという、探究の方向性の相違を提示している。しかしそれに留まらず、むしろその主眼は、人間の運動「能力」の発生と形態「化」にあり、すなわち運動が持続的に変化し、新たに産出され続けている「運動生成の現場そのもの」を捉えることにあるのだと考えられ得る。つまり、客観的な観測やその記録（映像記録や数値）によって、身体運動の形を空間的に、幾何学的に描き出すのではなく、身体そのものが感じている感覚体験を、変化として時間的に捉えるということである。これはまさに上で述べた運動感覚の時間性に重なる点である。こうした、常に現在進行形で現出する運動の感覚変化、すなわちキネステーゼこそ、スポーツ運動学の研究の要点となっていると言えるであろう。

しかし、現象学もスポーツ運動学も、こうした感覚体験の変化を、単に純粋に掬い上げるだけでは済まない（ただ、それをすること自体も非常に難しいのだが）。なぜなら、そうした感覚は、それが「人間」の感覚である以上、意味や目的、過去の経験といった、様々な周縁的な要素と編み合わされながら、共に成立しているからである。その意味で、マイネルが評価したボイテンデイクの運動学が「人間学的に根拠づけられねばならない」[8]ことを強調するのは当然のことであると言えるだろう。またそうした意味や価値、歴史、文化など、そういった周縁を持つ人間の身体性の諸特徴は、現象学では「地平（Horizont）」と呼ばれている。これは、意識の志向性の重要な特性であり、マイネルやボイテンデイクの運動学に対して極めて高い親和性を有する。こうした身体性の地平全体を、可能な限り視野に入れた上で、運動の諸問題を解明するというスポーツ運動学の目的とその諸成果は、まさに身体学の実践的な応用として非常に有効であり、現象学の理論的な骨子の肉となることが期待できるのである。

以上のことから、身体学の内実とは、現象学に基礎を置きつつも、スポーツ運動学と互いに両輪となって、身体運動の問題系を研究することを目標とするのである。そのために、身体学は一個の学を構築すると共に、これまで諸科学が客観的ないし対象的に扱ってきた身体を、前提から根本的に問い直すことをも要

求する。なぜなら、諸科学が探究「対象」として、言わば物体的に措定している身体というものは、上で述べたように、現実には感覚し、運動し、知覚し、経験する、まさに「生そのもの」だからである。また同時に、そうして科学的に研究すること自体も、その「生そのものの経験」に他ならない。「科学的に研究する」という行為が、まさに人間の意識的な行為である以上、対象から離れ、影響を与えることのない観測者として独立するということは、単なる理想であって現実ではない。こうした、「生そのもの」の次元を取り出し、そこから客観的ないし対象的な身体が措定されてくるという認識経験のプロセスを明らかにすることが、「前提からの問い直し」ということの意味である。この生という前提、すなわち全ての経験の根源を把捉することで、客観的な観測対象と主観的な観測者の区別が、実は一つのものであり、互いに影響を及ぼし合っているということが理解される[9]。つまり、両者を全体的な関係性として把捉してこそ、その真の在り方に肉薄することが可能となるのである。したがって、身体学は、諸科学に対して批判的な距離を取りつつも、その諸前提を問うた上で、積極的にそれらの成果や方法論を考察に取り入れ、包括的に身体の問題系を扱うものとなる。

したがって、そのために本研究がまず行うべきこととは、1.「身体性の生成」の原理とその問題系の見取り図を作成し、2. 問題探究の方法論を呈示することである。これらのことが、身体学が「学」という身分を確定するために必要な、当面の課題となる。

3. 身体性に関する哲学的な研究状況の概略

上で提示した二つの課題について述べる前に、多少冗長ではあるが、本研究の位置づけを述べておくことにしたい。すでにフッサールによって身体学という領域が呈示されているとは言え、スポーツ運動学との関係の中で、一個の領域として独立的に、また新たな内実と目標を持って始められようとする「学」であるならば、関連する研究も比較のために確認しておく必要があるだろう。以下において、現象学とスポーツ運動学を中心に、その点を述べる。

a) 身体性の哲学的研究としての現象学について

身体性の現象学的な研究は、上述したように、フッサールのキネステーゼ分析（運動感覚の分析）に始まる。そしてその研究を、彼の弟子であるメルロ＝ポンティとラントグレーベが継承し、その研究の基礎が築かれ、50年以上経った現在も世界中で研究されている。特にヴァルデンフェルスの『講義・身体の現象学−身体という自己』（知泉書簡、2004年。原著は *Das leiblich Selbst*. Suhrkamp, 2000）は、ドイツとフランスの現象学に詳しい著者が身体性哲学を総じて論じた重要な研究である。そしてここ数年、フランスでは哲学的身体論の著作が多数出版されている[10]。また、認知科学との学際的研究も行われており、例えば、ヴァレラの神経現象学は、認識と環境世界の相互関係を、身体の「イナクション（enaction）」として呈示している[11]。これらの哲学的な身体性の研究は、1990年代から2000年代に多くの業績が呈示された。

国内においても、身体性哲学を呈示した市川浩（『精神としての身体』勁草書房、1975年）、現象学的な分析の中で感覚の媒体性を明らかにした新田義弘（『世界と生命』青土社、2001年）をはじめ、精神病理学、リハビリテーション、緩和ケア、舞踊、芸術など、様々な領域において身体性の現象学は応用されている[12]。これらの身体性に関する国内の研究は、国外の研究と共に、応用的な学際研究として、現在も様々な分野で展開されている。

b) スポーツ運動学における身体性の研究について

以上のように、身体性の現象学的な研究は、様々な分野に用いられている。そして周知の通り、スポーツ運動学も、現象学を用いた研究の一つである。

上述したように、ドイツのマイネルに始まるスポーツ運動学は、スポーツの科学的な運動分析とは異なった、運動における主観的な感覚体験である技それ自体の研究と、その修得が如何にして成されるのかという発生的な研究を目的としている。特に日本では、それを岸野雄三が現象学の方法論を重視し[13]、人間学的−現象学的運動学として発展し、金子明友によって体系化された（『わざの伝承』明和出版、2002年）。日本におけるスポーツ運動学の研究は、岸野

以来、現象学的な分析方法を重要視して、「身体知」というこれまで学問的に問題とされてこなかった領域を見出し、体育教育の現場において積極的な研究がなされている。

他方、発祥のドイツでは、マイネルの独創である形態学的な視点が重要視されず、科学的な研究が押し進められ、90年代には、現象学との積極的な学際的研究は見られなくなったようである[14]。しかしながら、近年、ドイツでもマイネルの運動学が見直されている機運がある[15]ようなのだが、しかし現象学との関係という点では、日本のスポーツ運動学の方が進んでいるというのが現状であろうと思われる。

以上のことからも分かる通り、「身体学」という一個の学問体系の構築を目指す本研究の位置づけは、現象学的な身体性研究とスポーツ運動学研究の延長線上にあると言える。逆に言えば、本研究は、独自性という点では今一歩の感は拭えない。とはいえ、しかしながら、これら両研究は、内容や目的において非常に近接しているにもかかわらず、両領域間で活発な交流があるとは言い難いという事情も実際のところである。そこで本研究が寄与し得るであろうことは、両研究領域の理論と方法論を整理して統合し、それをもう一段大きな学問の位置へと止揚する、というところにある。結果的に独創性が生じるか否かは課題であるが、まずは問題提起、そして試論というかたちで一石を投じることとする。

4. 身体学における四つの研究課題

上述のように、現象学と運動学は、「身体の如何に」を探求する際、運動の感覚に研究の焦点を置くところが共通している。そこで本研究は、これら両学問領域を用いて、運動の感覚を「原理的に」研究することを目指す。では、原理的とはここで何を指しているのか。例えば、運動は空間内の位置移動や、ある形態として現れるが、そうした移動や形態化は、感覚の時間的な生成消滅として認識されるということを上で述べた。このことはつまり、運動や空間は、「時間から考察されねばならない」ということに繋がっていく。特に、現象学における「時間意識」の研究は、身体性を原理的に考察する場合に欠かせない。なぜなら、この時間意識の働きこそが、感覚の変化を変化として根源的に構成しているからである。この点の詳細については、紙幅の関係上、今回は指摘のみに留まるが、改めて詳細に考察されるべき課題である（これについては、後述の課題提起の際に再び指摘される）。

つまり、身体感覚の解明が単なる記述に留まってしまっては、それだけで原理を指摘することはできないということである。その原理を理解してこそ、問題の内実が適切に把握されるのであり、闇雲に事実を羅列するだけでは盲目である。したがって、本研究が原理として据えるキネステーゼと時間意識の観点からの分析は、身体学において徹底して考察される必要があるだろう。

他方、スポーツ運動学は、時間意識の諸原理を非常に重要視し、「コツ」や「カン」といった技の修得や発動の場面の考察で、現象学の時間意識分析の成果を活用している[16]。それは、誤解を恐れず要約を述べれば、過去の経験の蓄積がコツを形成し、そのコツを未来へ投影することでカンを得るということである。特に、金子は、「コツは求心的で自我身体に〈中心化〉されるのに対し、カンは同一の出来事に共属しているから、このコツとカンのもつ重複一元性は生き生きした動感身体のなかで〈同時反転性〉という奇妙な現象を生み出すことになる」[17]と述べており、これはまさに現象学において見出される時間意識の能作に他ならないと考えられる。時間意識の能作である過去把持（Retention）と未来予持（Protention）は、志向する方向が真逆であるにもかかわらず、両者は鏡写しのように意識の展開を構成する。異なる時間様相である現在と過去と未来が、「今ここの身体」に重複し同時に展開されているという逆説的な事態を、金子は実践に即して正確に記述していると言えよう。つまり、スポーツ運動学は、運動技術がまさに作動している現場で起こるその都度の時間位相を現象学的に微分して見出される根源的な構造として指摘していると言えるだろう。多くの運動学研究者が現象学に対する理解を深め、応用、実践しているという現状は、現象学の側にも重要な示唆を与えてくれる。

だが、こうした学際研究の際には、他領域の知識や理論を非常に注意深く用いねばならず、それが研究遂行のハードルとなることもしばしばある。そもそも現象学は、表現や術語上の困難さを持つがゆえに、スポーツ運動学研究者に非常な負荷を強いているという印象がある（このことは、スポーツ運動学に対してだけでなく、医療や芸術などの領域に対してもそうであろう）。このハードルが研究の妨げや縮小につながってしまうならば、そのハードルを超えるための方法を整備する必要があるだろう。この方法の整備によって、身体性研究は、生き生きとした素材を分析できるようになり、またその方法に則って、研究参加が容易になると考えられる。このことからも、身体学は、単に身体とその運動感覚の記述と分析に現象学的な時間意識論を原理論として規定するという仕事だけでなく、身体を巡る問題系を「現場」において探求する方法論も呈示する必要がある。

そこで身体学は、以下の四つを主要な研究課題とする。

1. 運動と空間構成に関わる「キネステーゼと時間意識」の研究とその分析方法の呈示
2. 「ゼロのキネステーゼ」による身体性と自我の発生の解明
3. 「間身体性」おける感覚の形成と原交通（モナドの共鳴）の解明
4. 以上の原理論を基にした、運動者における実践的な体験記述の方法論の研究

1.から3.が原理論研究であり、4.が方法論研究となる。4.の方法論研究は、原理論研究と並行して行われる。その中でも特に1.の課題は、原理論研究の基礎となる。そこで身体学は、まず現状の身体運動に関わるキネステーゼと時間意識の能作を理解（これを差し当たり「静態的な分析」と呼ぶ）した上で、さらにその体験の発生ということを問題にする（これを「静態」の対として、「発生的な分析」と呼ぶ）という道筋を採る。

現象学において「発生」というのは、意識の深層の次元、すなわち無意識的な意識の働きによる意味内容の構成を意味する。そのような発生という事態を問題にする中で、体験が無意識的に（換言すれば、非自我的に）構成されている「場」へと遡及することが求められる。その遡及的な探究の中で、現象学では、精神的な、自我のものとして把捉される感覚と、その感覚に関わる物体としての身体の感覚器官という区別を最初から前提せず、それらは未分化な相関領域としての媒体（Medium）であるとする。まさにこの媒体が、キネステーゼの根源となる「ゼロのキネステーゼ」の契機であり、その契機から身体性が発生する「場」なのである。そうした理解から出発することで、そもそも感覚が如何にして感覚と成るのか、身体が如何にして身体と成るのかという、根本的な条件や本質規則性を見出そうという試み自体が可能となるのである。むしろ、こうした根源へと探求の眼差しを向けることで、上述した哲学の伝統的な問いである精神としての自我と、物体としての身体の分裂が初めて理解できる[18]。したがって、この媒体としての身体という領野から精神（自我）と物体（自我以外のもの）という区別が生じるという論証が、2.の課題なのである。

そして、それらの論証とその必当然的な明証性を下敷きにして、最も根源的な無意識の層が顕わになったならば、そこでは、そもそも「身体が身体になる」ために「他者」との感覚の共有が必要になるということが示される。上で述べたことからすれば、もちろんここで言う他者も存在措定される他者ではなく、自らの身体感覚を形成されていく際の契機に過ぎない。しかしこの契機は、身体が身体として、すなわち人が人として成立するための要件であり、これがまさに、現象学で「間身体性」と呼ばれる根源的な生成基盤なのである[19]。こうした他者という契機は、現象学では、他者性を持つ「モナド（Monade）」、すなわち媒体としての身体という一個の単位として考えられ、私と他者のモナド（あるいは環境世界の全て）の関わり合いは、原交通（Urkommunikation）として相互関係の中にあると看做される。こうした原交通の中で各モナド同士が共鳴し合い、「個々の」モナドが際立って生成してくる。こうした人と人との「間」という、等根源的な位相を理解することが、差し当たり、身体学の原理的な理解という側面の最終目標となる。

以上が、三つの原理論それぞれの概略である。これらの課題の内実全てを語り尽くすことはここではできないが、本稿では、以下で原理論の核となる1.と、方法論の試みとしての4.を詳述して、一旦稿を閉じることとする。

5. 身体学の原理論と方法論

1.の課題の具体的な内実は、以下のものである。

(1) 身体学研究の射程を定めるため、具体的な事例（身体運動の不可逆性、キネステーゼという運動遂行時における身体感覚の二重性）から、現象学的な身体構成論を研究する。
(2) 具体的事例から身体構成の本質規則性を現象学によって見出し、身体学を本質学として扱うための原理論として明確に規定する。

つまり、身体学研究における問題領域の核心である運動感覚と時間性の内実を理解することと、それが単に事実の例示ではなく、本質に対する学として成立し得るための領域を明示し、それらを原理として提示する、ということが、まずは求められるのである。

そこで、そうした原理的な洞察に相応する具体例とその収集のために、4.の課題として、各スポーツおよび武道の競技者による体験記述レポートの収集を行う必要がある。これが身体学研究の方法を担うこととなる。つまり身体学研究は、運動者の運動感覚の体験記述を個別事例として取集した上で、その本質、様々なキネステーゼを直観することを目指すのである。本質とは、そもそも概念的なものであり、具体的な経験の事実を基づけるものとして、理念的に把握される意味内容であるが、その経験から理念へと至るには、ある種の方法的なプロセスが必要である（それを現象学では、本質直観と呼んでいる）[20]。その本質直観のための具体的な活動としては、諸事例から帰納的に導出するという方法をまず採ることになるだろう（例えば、その個別事例は、競技者の体験レポートの記述や聞き取りの収集によって得られるだろう。そこでは、収集の効率的かつ効果的なシステム化も検討する必要があるだろう）。収集した体験記述の整理と分析をした上で、本質規則性を把握する本質直観を試みるのである。

上で述べたように、競技者の体験記述レポート収集は、まさに身体学研究の肉となる。身体という具体的な事象を扱う以上、事例の収集は不可欠である。スポーツや武道は、それぞれに独特の運動形態を持ち、その形態に即して生じる運動感覚もまた独特である。こうした独特かつ個別的な感覚から、その原理としての本質規則性を見出そうとする場合、同じ競技におけるそれぞれの競技者の複数の体験記述はもちろんのこと、何より異なる競技間の差異と類似に注目する必要がある。なぜなら、それら差異性と類似性の精査と比較の中で、本質と言い得る共通項が見出し得るからである（このことは、現象学における本質直観の方法プロセスの中に含まれる操作でもある）。したがって、可能な限り、多種多様な競技経験者、また多様なレベルの競技者に対し、事例収集に協力してもらう必要がある。

しかしながら、こうした体験記述レポートを書くという経験が、競技者にとって特殊な経験であると予想される。競技者本人は豊かな運動感覚の体験を持っているが、「運動感覚を書き起こす」ための「見方」と「方法」を持っている者は希であろう。その点で、現象学はまさに感覚体験を記述する方法（現象学的還元と本質直観）を持っていることから、それを競技者はもちろん収集者が身につけることができれば、目的のレポートの収集や、運動に対する考察の契機とすることも期待できる。しかし、競技者にその正確な理解を求めて方法を実行することは、簡単なことではないだろう。そこで、それを記述に起こす工夫をとして、差し当たり、以下の四つのことが呈示され得る。

1. 映像による運動の記録
2. 擬音語や擬声語、擬態語（オノマトペ）による表現
3. 運動や技に対する反省による経験の明確化
4. 運動や技に対する修得や達成という動機の言語化

運動が生じている際、その都度の運動感覚や身体感覚が顕現的に意識されているわけではないが、しかしそれらは無意識的に記憶されている（これは、上で述べた過去把持の働きである）ので、記述の際はそれを呼び起こす必要がある。それが1.の映像記録の役割である。記録はそもそも、記憶を呼び覚ます指標として主に用いられる間接的な道具であり、それそのもの映像分析ではなく、あくまでメルクマールに過ぎない。つまり、重要なのは記憶の方である。そして、呼び起こした記憶を表現するとき、即座に言語化するのは、また困難であろう。むしろ、2.のオノマトペのような音やリズムによる表現で、感覚の変化を呈示する方が、より運動感覚の内実に近いものになると考えられる。これは、形態学的運動学との相性も良いと思われる[21]。

そして、3.の反省による明確化であるが、これは、1.の映像記録とは異なり、感覚を内的に捉えた記述を期待している。特に、身体の側面だけでなく、精神的な心持や、「コツ」という人それぞれが持つ感覚を呈示するために、反省という言語的な方法を用いる。このことは、4.の動機の言語化においても同様である。反省が過去のことであれば、動機は未来のことである。記述者の運動のフォームや、技に対する希望や理解、「カン」と呼ばれる行為可能性の投企を表現してくれることを期待している。

以上のことから、これら四つの記述のためのポイントを用いて、体験記述レポートを作成し、収集することになる。こうした原理論と方法論を重ね合わせて、身体学の研究を展開したい。

6. おわりに

身体の根本原理である感覚や運動の発生的な原理と、その発生の仕組みを捉える方法という、これら二つのことの解明は、結果的に身体に関わる諸研究や諸学問の原理的な基盤と方法論を提供することになる。これによって、個々の主観的な体験に過ぎないと見過ごされてしまうものを、現象学的な方法論によって学問としての普遍性へと押し上げ、探究の正当性を呈示し、かつ、研究の発展を下支えするという意義を、身体学が持ち得るように、以上の課題を研究していくこととなる。

注

1　例：Husserliana（Den Hagg, Kluwer Academic Publishers, 1950-.）からの引用は、Huaと略し、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字によって（　）内に示し、原書による強調を強調、筆者による強調を強調とする。

2　エトムント・フッサール『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想（イデーン）　第3巻　現象学と諸問題の基礎』渡辺二郎・千田義光訳、みすず書房、2010年、11頁参照。渡辺と千田の訳では、「身体論」となっている。しかしながら、本稿の意図に照らして、「論」ではなく、「学」として表記する。

3　これについてフッサールが『イデーンI』の中で、「あらゆる具体的で経験的な対象性は、ある最上位の質料的な類、経験的な諸対象の、ある「領域（Region）」という、その対象性の質料的な本質と共に組み入れられる。その純粋で領域的な本質に、ある領域的な形相学が相応し、あるいは〔それを、〕領域的な存在論と我々は呼ぶことができる」（HuaIII, S.23）と述べているように、本質ないし形相としての確定され得る存在は、概念によって表示される形でその領域を示す。まさに学問とは、こうした領域における存在者を扱い、特にその本質や形相、理念、規則性など、純粋な存在を扱うものである言える。

4　M. メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』第2巻、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄共訳、みすず書房、1974年、179頁参照。

5　村上勝三『感覚する人とその物理学』知泉書館、2009年、208-215頁参照。

6　ここで言われる「スポーツ運動学」は、本文で後述するように、マイネルやボイテンデイクの主観的な感覚や意識の地平に根差した運動の研究を目指す現象学的な運動学であり、キネオロジーないしバイオメカニクスといった、自然主義（自然科学）的な運動研究とは異なる（金子

明友、朝岡正雄編『運動学講義』大修館書店、1990年、3-6頁参照)。なお、本文では前者をスポーツ運動学、後者を運動学と表記する。

7　金子明友『スポーツ運動学　身体知の分析論』明和出版、2009年、2-18頁参照。

8　Buytendijk, F. J. J., *Allgemaeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung*, Springer Verlag, 1956, S.30.

9　松野孝一郎『内部観測とは何か』青土社、2000年参照。

10　Cf. Andrieu,B., *Toucher, Se soigner par le corps*, Paris, Les Belles Lettres, 2008.

11　Cf. Varela, F. J., et al., *Cognitive Science and Human Experience*. Cambrige, MA: The MIT Press. 1991.

12　河本英夫『システム現象学』新曜社、2006年参照。

13　金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年、iv頁参照。金子によると、「岸野先生は、わが国の新しい運動学、とくに現象学的、形態学的地平をもつ運動理論の生みの親である」と述べられている。

14　朝岡正雄『スポーツ運動学序説』不昧堂出版、1999年参照。

15　山口香、Dieter Teipel、Reinhild Kemper、浦井孝夫、市村操一「ドイツにおける柔道の技のイメージ研究がわが国の柔道指導法研究に与える示唆」『筑波大学体育系紀要』第37巻所収、筑波大学体育系、2014年、101-112頁参照。

16　金子明友『運動感覚の深層』明和出版、2015年参照。

17　上掲書33-34頁参照。

18　こうした考え方の雛形は、フッサール現象学における静態的現象学と発生的現象学の区分をモデルにしている。本学の科目で言えば、「身体学」が前者に対応し、「幼児身体学」が後者に対応する予定である。

19　山口一郎『存在から生成へ』知泉書館、2005年参照。

20　この本質直観のプロセスについて、フッサールの『経験と判断』第87節を参照のこと。

21　身体性哲学が時間意識の観点で分析されることは、現象学的な観点以外からはあまりないが、しかし、クラーゲスのように、運動に対するリズム性(時間性)が形態化に関わると指摘している点は重要である(ルートヴィッヒ・クラーゲス『リズムの本質について』平澤伸一・吉増克實訳、うぶすな書院、2011年参照)。

参考文献

〈Husserliana〉

Bd. III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch. Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, hrsg. von W. Biemel, 1950. Als neue Erscheinung: Erstes Halbband. Texte der 1. 2. 3. Auflage; Zweites Halbband. Ergänzende Texte (1912-1929), hrgs. von K. Schumann, 1976.

Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution, hrsg. von M. Biemel, 1952.

Bd. V: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Drittes Buch. Die Phänomenologie und die Fundamente der Wissenschaften, hrsg. von Biemel, 1952.(エトムント・フッサール『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想(イデーン)第3巻　現象学と諸問題の基礎』渡辺二郎・千田義光訳、みすず書房、2010年)

〈フッサリアーナ以外の文献〉

Andrieu, B., *Toucher, Se soigner par le corps*, Paris, Les Belles Lettres, 2008.

朝岡正雄『スポーツ運動学序説』不昧堂出版、1999年

Buytendijk, F. J. J., *Allgemaeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung*, Springer Verlag, 1956.

Husserl, E., Erfahrung und Urteil. Untersuchung zur Genealogie der Logik, hrsg. von L.

Landgrebe, Hamburg, Felix Meiner, PhB 280, 1972.（邦訳：『経験と判断』長谷川宏訳、河出書房新社、1975年）
金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年
金子明友『スポーツ運動学　身体知の分析論』明和出版、2009年
金子明友『運動感覚の深層』明和出版、2015年
金子明友、朝岡正雄編『運動学講義』大修館書店、1990年
河本英夫『システム現象学』新曜社、2006年
ルートヴィッヒ・クラーゲス『リズムの本質について』平澤伸一・吉増克實訳、うぶすな書院、2011年
松野孝一郎『内部観測とは何か』青土社、2000年
メルロ＝ポンティ, M.『知覚の現象学』第2巻、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄共訳、みすず書房、1974年
村上勝三『感覚する人とその物理学』知泉書館、2009年
山口一郎『存在から生成へ』知泉書館、2005年
山口香、Dieter Teipel、Reinhild Kemper、浦井孝夫、市村操一「ドイツにおける柔道の技のイメージ研究がわが国の柔道指導法研究に与える示唆」『筑波大学体育系紀要』第37巻所収、筑波大学体育系、2014年
Varela, F. J., et al., *Cognitive Science and Human Experience*. Cambrige, MA: The MIT Press. 1991.